

兎島君を悼む

小 川 隆

(中国語)

職場には二種類の人がいる。誰かがやらねばならない仕事について、自分にはそれをやる責任がある、と考える人。もう一種類は、誰かがやるのなら、それは誰かがやればいい、少なくとも自分でなくてよいはずだ、と考える人である。上司一部下という命令系統も、考課・査定といった仕組みもない大学教員という職種において、仕事が前者の人々に集まってしまうのは、不条理ではあるが、自然の勢いでもある。

兎島君は、まちがいなく、そして、時にいささか過剰なまでに、前者の人であった。彼は多くの仕事を進んでひきうけ、それを見事にやっけてのけた。おそらく多くの方は、彼を温厚で有能な好人物だと思っただろう。だが、彼は、ただのお人好しや仕事好きだったのではない。彼の内面には、無能で無責任な人間に対する、激烈な軽蔑と非難の情が秘められていた。ただ、彼は、ふだん、そうした人への非難を口にしなかった。逆に、責任や負担を逃れようとする人達を尻目に、平然と仕事をひきうけ、そして、それを事もなげに、しかし、要求されているよりもずっと高い水準で果たして見せることで、暗黙の批判を体現していたのである。むろん、かの人々が、その深意を感じて恥ずるようなことはない。しかし、彼には、それでよかった。彼にとっては、その偏激で屈折した高踏的精神が自らの内面で貫かれることにこそ、重い意味があったからである。この偏激と屈折は、彼が明代詩文という研究分野を選んだことと、どこか無関係でなかったように思われる。

兎島君と同僚だったのは、わずか三年余のことであった。しかもその初めの

1年、私は在外研究で不在だった。また3年目以降は、私の入学センター出向のため、ほとんど会う機会が無くなっていた。それが、亡くなる1週間前、月曜1時間目のあと、授業が終わったばかりの部屋に、彼がふらりと入ってきた。廊下で声が聞こえたから、と懐かしそうに言った。顔を合わせるのは、3月の卒業式以来だった。私はすぐ定例の会議があったので、たまには一杯やらなくちゃね、などと言いながら、短い立ち話で切り上げるほかなかった。だが、今、思うと、その授業は、同じ部屋で、同じ時間に、毎週、同じようにやっていたのだ。あの日は、もしかしたら、わざわざ訪ねて来てくれたのではなかったか……？ その時、彼は、抱えている仕事の難しさを少しだけ語り、その後はしきりに私のほうを気遣って、身体に気をつけてくれ、と何度も言った。それが児島君との最後の会話になろうとは、その時は思いもしなかった。彼の偏激な俗物嫌悪が、あのような裏返しの表現にならざるを得なかったのは、彼がいっぽうで、あまりにも人に優しすぎたためだったのだと、今にして思わずにいられない。

児島君が課外の中国語サークルで面倒をみていた学生の一人が、後期の初め、入学センターに訪ねて来た。児島老師の感化で中国語にのめりこみ、夏休みに上海の短期留学に参加した学生たちを代表してであった。課外の中国語学習会をひきついでもらいたいというのが趣旨だったが、彼女はその気持ちを「身近に信頼できる先生をもちたい」と表現した。その日がほとんど初対面だったので、このことばが自分に対する評価でないことは明らかだった。彼女はこのことばで、児島老師を失った自分たちの深い喪失感を語っていたのである。児島老師は、彼女たちにとって、まさにそういう先生だった。私たちにとって、彼がそのような同僚であったように。

彼らは今、毎週センターに通ってきて、健気に中国語の勉強をつづけている。児島君は、どこかでその姿を見ているだろうか。

2010年11月7日